

英語の冠詞の出現・発達について

茨木正志郎

1. 序論

本論では、英語の定冠詞の出現と発達のメカニズムについて議論する。英語の定冠詞は、古英語の主格・単数・男性の指示詞 *se* から発達したことは広く知られているが、その出現時期と発達過程について、言語理論に基づく分析はこれまで十分に行われてきたとは言えない。ここでは、英語史における定冠詞の発達について、その出現時期、発達過程、構造分析の3つの観点より議論する。2節と3節で定冠詞の出現時期と発達過程について議論し、4節で構造分析を行う。

2. 定冠詞の出現時期と発達

多くの先行研究が (Mustanoja (1960)、中尾 (1972)、Traugott (1972)、小野・中尾 (1980)等) 英語の定冠詞は中英語初期に出現したと述べているが、コーパスや文献調査に基づいた分析は管見の限り存在しない。そこで本節では、史的コーパス YCOE, PPCME2, PPCME を用いて調査を行い、定冠詞の出現時期について考察する。指示詞から定冠詞へ発達したと判断する材料として、Wood (2003)による(1)の基準を採用する。

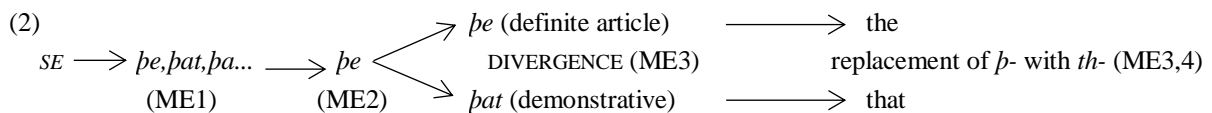
(1) (i) when plural nouns started to be introduced by the definite article

(ii) when demonstrative were no longer able to appear independently (Wood (2003: 67))

(1i)の基準は、定冠詞によって複数名詞句が導入され始めた時期を、(1ii)は、指示詞が独立的に、すなわち、代名詞としての用法を失った時期を意味する。また、ここでは、主格・単数・男性の指示詞 *se* が *pe* の形態に変化した時期が、定冠詞の出現した時期であるという仮定に基づいてコーパス調査を行った。その結果、定冠詞 *the* の発達には3つの段階が存在することが明らかとなった。まず、12世紀後半から13世紀前半にかけて、古英語指示詞 *se* の11の異形態が緩やかに水平化を始め、14世紀前半に *pe* の形式に統一される。15世紀には *pe* が(1)の2つの基準を満たすようになる。さらに、14世紀後半から15世紀後半にかけて、*pe* の“p-”が“th-”に置き換わり、定冠詞 *the* となる。本論では、(1)の2つの基準を満たすようになる14世紀後半から15世紀の間に、*pe* が定冠詞として出現したと主張する。

3. 文法語から接語へ—分化と漂白化

2節でのコーパスデータ調査に基づいて、古英語の指示詞 *se* から定冠詞 *the* への発達は次の(2)のようにまとめることができる。



ME1: 1150-1250, ME2: -1350, ME3: -1420, ME4: -1500

(2)の変化には、分化(divergence)と漂白化(semantic bleaching)という、2つの文法化プロセスが関わっている。分化とは、Hopper and Traugott (2001)で次のように定義されている。

(3) when a lexical form undergoes grammaticalization to a clitic or affix, the original lexical form may remain as an autonomous element and undergo the same changes as ordinary lexical item

(Hopper and Traugott (2003: 118))

漂白化とはある語の持つ意味が弱くなるということというが、定冠詞は指示詞が持つ直示的機能を失っているという点において、漂白化が起こっている。ここでの分化と漂白化による定冠詞の発達は、Hopper and Traugott (2001)での(4)のラインに沿った文法語(grammatical word)から接語(clitic)への変化の事例である。

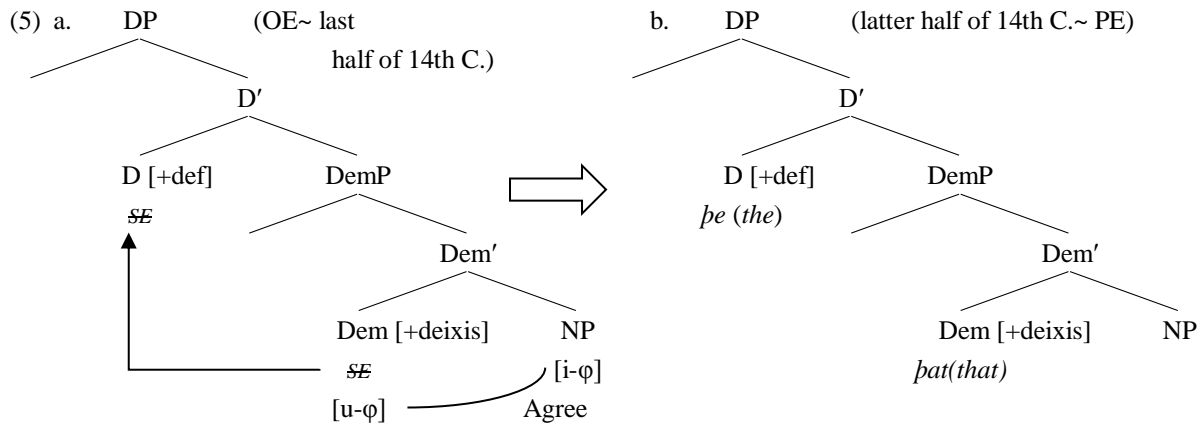
(4) content item > grammatical word > clitic > inflectional affix (Hopper and Traugott (2003: 7))

文法語は独立的に現れることができる。指示詞には代名詞として独立的に現れることができるが、定冠詞にはそのような用法は無い。定冠詞は後続する名詞を必要とするので、接語的要素であるといえる。

4. 構造分析と文法化の要因

2節3節で概観したコーパス調査の結果と文法化を基に、本論での構造分析を提案し、分化と漂白化が起こ

る原因についても考察する。まず、定冠詞の発達は(5a)から(5b)への変化であると主張する。



本論では、(5)に示すように、DP と NP の間に DemP が存在する構造を採用する。古英語の指示詞は Dem 主要部に規定生成され、解釈不可能な ϕ 素性を持ち、NP の持つ解釈可能素性との間で Agree 関係に入り、その後、(6)の定性の原理に従って、D 主要部へと繰り上がる。

(27) Definite noun phrases are licensed iff the [+definite] feature of D enters into a checking relation with its matching element(s) in a Spec-head and/or head-head configuration. (Ibaraki (2009: 84))

Ibaraki (2009)によれば、名詞句の定性が認可されるのは、D 主要部の[+definite]素性を持つ D 主要部が、その指定部か主要部に定性を持つ要素によって占められ、Spec-head あるいは Head-head 関係に入ることができる場合である。(5a)では、D 主要部の[+definite]素性を認可するために指示詞が D 主要部へ繰り上がっている。

15 世紀後半に、定冠詞としての指示詞 *þe* は ϕ 素性と[+deixis]素性を失うと、直接 D 主要部へ基底生成される要素として再分析される。3 節で述べたように、 ϕ 素性と[+deixis]素性を失っているという点において、意味の漂白化が起こっている。文法化の動機について、ここでは、使用頻度の増加が意味の漂白化を引き起こしたと主張する。つまり、水平化によって指示詞の各形態が *þe* という 1 つの形態に統一され、*þe* の使用頻度が急激に増えたため、漂白化が起こり、純粋な前方照応機能を持つ定冠詞が誕生した。

5. 結語

本論では、定冠詞の出現・発達に対して文法化の視点から分析を試みた。史的コーパスに基づいた調査より、定冠詞が出現したのは 14 世紀後半であると主張した。また、指示詞から定冠詞への発達は分化と意味の漂白化という 2 つの文法化プロセスが関わっていると主張した。

References

- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ibaraki, Seishirou. 2009. The Development of the Determiner System in the History of English. *English Linguistics* 26, 67-95.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki : Soci t  N ophilologique.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史 II』 東京 : 大修館書店.
- 小野茂、中尾俊夫. 1980. 『英語史 I』 東京 : 大修館書店
- Traugott, Elizabeth Closs. 1972. *A History of English Syntax: A Transformational Approach to the History of English Sentence Structure*. New York. Holt, Rinehart and Winston.
- Wood, Johanna L. 2003. *Definiteness and Number: Determiner Phrase and Number Phrase in the History English*. Doctoral dissertation, Arizona State University.

Corpora

- Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2000. *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English Second edition (PPCME2)*, Pennsylvania: University of Pennsylvania.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2004. *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*, Pennsylvania: University of Pennsylvania.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths. 2003. *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)*, Heslington: University of York.